

06 阪南市

地域特性と課題

阪南市は、大阪府の南部に位置し、海・山を中心とした自然環境に恵まれた詩である。

古くから、農業や漁業が営まれており、製造業では、加工しやすい和泉砂岩を活かした産物や瓦の製造、綿織物の生産地として繊維産業などが発展してきた。

その後、昭和40年代頃から始まった産業構造の変化により、繊維産業などの伝統産業の一部は衰退したが、地場産業の優れた「技」の伝承と「ものづくりの心」を活かす取

り組として、2009年に「阪南ブランド十四匠」を立ち上げ、地場産業の振興を進めている。

また、大阪都市近郊のまちでありながら山と海が近く、海岸には、浅場や干潟などの自然環境が残された里海が広がっており、海の豊かさを体験できる「せんなん里海公園」からの夕景は「日本の夕陽百選」にも選ばれている。

しかし、若年層の流出が目立ち、出生数の減少傾向が顕著となっており、今後さらなる高齢者の増

加、現役世代の減少が見込まれている。市税の減少や社会保障関連費用の増加などが予想されており、このような状況が続くと、地域の豊かさをにぎわいの創出の継続を確保できなくなる可能性がある。そのため、「地域資源」を有効に活用し、「地域社会・経済の今後さらなる活性化につながる好循環を生み出していくこと」が重要である。

市民一人ひとりが知恵や能力を発揮し、まちづくりの場（舞台）で新しい価値の創造に挑戦する

「共創」の取り組みを推進していくことにより、高齢者になっても、誰もが主役として輝くまちづくりを進めていく必要がある。また、多くの人が集まり、にぎわいなどの活力を創出するため、多様な地域主体の活躍支援、商工業・農業・漁業の先進技術活用支援、起業支援、教育機関との連携などにより、地域資源を最大限に活用するとともに、都市部にありながら、豊かな自然資源を有している強みを最大限に生かし、地域ぐるみで子どもから親

「びちびちビーチ」から臨む夕陽。「日本の夕陽百選」の認定を受けている。

人口（令和2年国勢調査）：5万1254人
面積（参考）：36.17平方キロメートル



1 海の自然再生（アマモ場再生）活動を企業と連携し、推進している。

- 2 阪南市×伊藤園「お茶のある暮らし」プロジェクト。
- 3 植樹後の茶畑



SDGs 推進に向けた取り組み

人と自然が共生・共創するCo-ベネフィット型未来都市の実現

そのまた親にとっても住みやすい地域づくり、誰もが住みたい・住み続けたいと思える持続可能な地域づくりを進めることが必要である。

2030年のあるべき姿

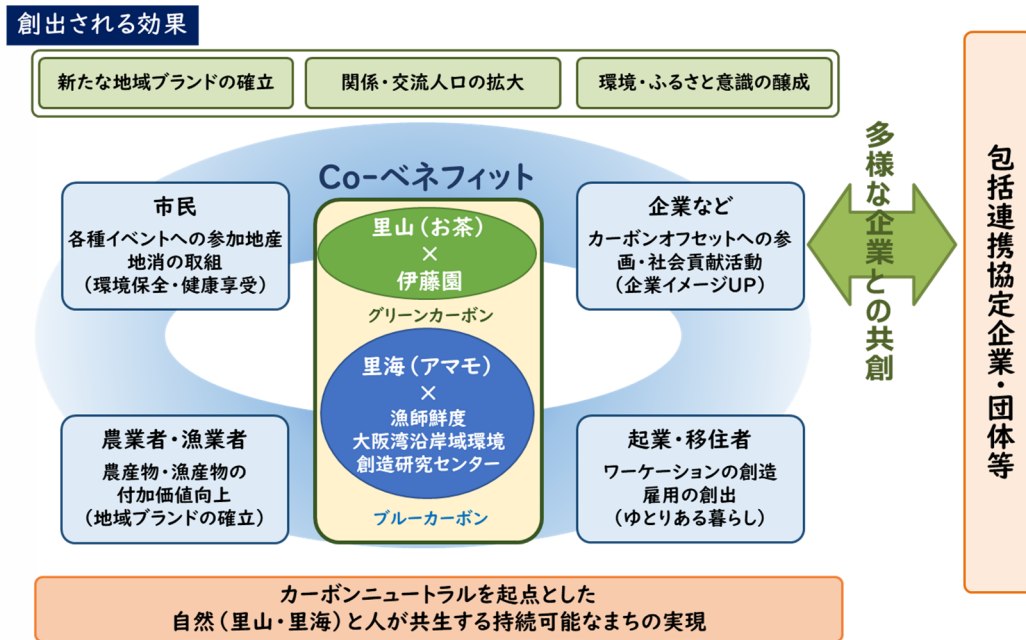
『共創による新しい地域価値が創造され、誰もが輝ける舞台都市・阪南』を実現するために6つの基本目標を設定している。

- ①人と地域がつながり、多様な価値観とにぎわいによる共創のまち
- ②誰もが、健やかにいきいきと暮らせるまち
- ③安全に、安心して暮らせる住み続けたいと思えるまち
- ④人生100年時代を迎え、誰もが学んだ成果を地域で活かして輝けるまち
- ⑤にぎわいと交流を促し、自然環境と調和した未来のまち
- ⑥持続可能な発展を支える行政経営のまち

取り組みの概要

農空間や海浜空間といった地域資源を活かし、

■ 三側面をつなぐ統合的取り組み



カーボンニュートラルの取り組みを通じて様々なCo-ベネフィット（恩恵）を創出することで、関係・交流人口を増やし、消費の拡大につなげ、環境にやさしい好循環な地域づくりを実現する。

くりの実現を図るものとしており、多様な主体との連携のもと、共創によるプロジェクトを展開し、人と自然が共生するCo-ベネフィット型未来都市を実現する。



未来創生部シティプロモーション推進課 課長 前田 雅寛さん

interview

阪南市の未来都市に向けての取り組み

取り組みにあたり苦労したこと

阪南市では、SDGsの取り組みを、未来創生部シティプロモーション推進課が中心となって進めています。環境・教育・福祉など多種多様なテーマにまたがるSDGsを同課だけで担うのは限界があり、様々な関連部署の関与が必要で、本市では、市長を本部長とし、各関連部署を巻き込んだ推進本部を2019年に設置し、総合的に持続可能なまちづくりに取り組んでいます。

また、企業との連携も重要と考え、各種連携事業に取り組んでいます。事業を進めていくにあたり、どうしてもスケジュールがタイトになることもあり、解決策を日々模索する中で、対話によって、企業の考え方や庁内の他部署の考え方を把握しながら、互いの協力で乗り越えることができました。

そのような実績を重ねることにより、企業と自

治体との関係がより促進されたと考えています。

ステークホルダーとの連携の在り方

本市では、加速する少子高齢化と人口減少、また、ライフスタイルの変化や情報化の進展などにより、市民ニーズは多様化しており、行政課題は複雑化・高度化している中、企業等との連携を図り、共に知恵と力を出し合い、まちづくりを進めていく必要があります。

企業連携においては、民間企業と市は、対等なパートナーとして、互いの強みを生かし、Win-Winとなる関係を築きながら、市民にとってもメリットのある「三方良し」の連携を推進します。

他地域への展開見込み

本市では、「アマモ」を象徴的なキーワードとして海の自然再生・保全を目指している「全国アマモサミット」の第11回大会を2018年に開催しました。環境保全のためのアマモ場再生のみではなく、

地域の様々な課題を共有し、全国各地の沿岸域とともに、その課題解決に向けて連携を行い、取り組んでいます。

(株)伊藤園と連携して実施する、市内の遊休農地を茶畑に転換し、CO₂の削減につなげるよう取り組んでいます。近隣の泉州地域の各自治体と連携して取り組むことで、環境に優しい都市近郊型農業に取り組む地域として、泉州地域全体のブランド化へと普及展開していくことを目指しています。

海については、アマモの保全・再生などの様々な活動を通じ、多くの市民・団体の皆さんが、海と親しみ、海とふれあう場づくりをしています。

本市には、大阪湾で数少なく残ったアマモの自生地があり、この自生地の保全・再生に向け、多くの市民・団体のみなさんが活動されています。アマモ場では、アマモにより波がおさえられ、水の流れが緩やかになります。

また、隠れる場所がたくさんあることから、魚や貝、エビやカニが卵を産み、子どもを育てる場所となります。このことからアマモ場は、干潟とともに「海のゆりかご」と呼ばれています。

また、アマモはCO₂を吸収することから、里海を活かしたブルーカーボンの取り組みについてお話を聞きたいというお話を他地域からいただいたり、海洋の保全についても一緒に携わりたい、参加したいというお話を他の自治体からいただくこともあり、本市の取り組みが他地域への展開の可能性を感じております。

今後の展開

遊休農地に茶木を植樹する事業については、茶摘みができるまでには4、5年かかり、経年的な状況を確認する必要があります。

ますが、順調に進んで来ています。本市で育てた茶は、伊藤園に買い取ってもらうだけでなく、ゆくゆくは阪南市ブランドの茶として、規模が小さいながらも売り出せたらいいなと考え、市で検討しているところです。

海の再生については、本市では「大阪で牡蠣が楽しめるまち」として企業を中心となって牡蠣小屋を運営しています。また、牡蠣の殻むき体験といった体験観光を通じて、交流人口の拡大を図っています。

「お茶とアマモから始まるカーボンニュートラル」は「はんなん・オーベネフィット」創出プロジェクトを本市の豊かな自然資源を活かした新たな地域ブランドの確立や交流人口の拡大につなげて参りたいと考えています。

■ 漁礁関係者の協力により、海を活用した地域学習(地引網体験や環境教育など)を実施しています。



- 2 山中溪地区における約 1000 本のソメイヨシノ、山桜。見頃写真は JR 阪和線山中溪駅付近の写真。
- 3 ご家族におすすめの公園「わんぱく王国」。巨大な恐竜の口の中に入るローラーすべり台はお子様にとっても人気。
- 4 四季折々の表情を見せる自然林、紀泉高原の深い山並みなど、変化に富んだ景色が楽しめる炬石山ハイキングコース。

1 「びちびちビーチ」上空、ドローンによる撮影。